

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, April 30th, 1957. No. 302

關西大學學報

昭和32年4月 第302号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年四月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第三〇二号



花の千里山

關西大學學報局

法學部 池垣定太郎

關西大學が遠く七十有余年の昔、「關西法律學校」として発足した際、創立者の意図したところは、その恩師ボアソナード教授の訓に従つて、法学教育を通じて「真理の究明と正義の擁護」を実現しようとするにあつたといふことは、關西大學七十年史に明らかにされていることである。關西大學が法・文・経・商の四学部を擁する新制の総合

大学として飛躍的發展を遂げた現在、創立者の意図の実現は単に法学部のみに限せられた使命というよりも全学部に通ずるスローガンとして掲げるにふさわしい遺訓といふべきである。し



注目され、機会ある毎

に鼓舞激励の勞を惜まれないのは感激の至りであると共に、責任の重大さを痛感するのである。法学部は更に教授陣の増強に意を注ぎ、研究活動を盛んにして関大法学の眞髄を世に問うと共に、新制大学の目的にのっとり法学教育の実を挙げ、優れた卒業生を次々と社会に送り出して、關西大學の名譽を高め、国家のため一層の貢獻を期している。機関雜誌「法学論集」は学界の注目するところであり、その寄贈、購入の申込も日々多

昭和三十二年度の抱負と展望

かし、本学七十年の歴史を貫く法学教育の永い伝統は、この使命の実現に対する努力をとりわけ法学部に期待することも当然のことと思われる。法学教育の輝やかしい歴史の中から幾多の人材が輩出し、現に各界の第一線に活躍して居られる校友の多くが、常に法学部の現状と動向に注目され、

きを加えつつある。法学教育の面に於ては、新制大学の教育目的の達成に努め、教養ある社会人を育成し社会の各方面に送り出すと共に、法学部卒業生としての専門的知識を生かして、法曹界・官界へ進出する氣運を一層助長すべく特別の考慮を払いつつある。教育と研究、いい一朝一夕で事の成るものでないが、今後ともたゆまざる努力を重ねて建学の理想の実現のため邁進したいと考えている。

× × ×

経済学部長 森川太郎

近頃読んだ金融政策に関する書物の中に、小さいことを重ねて大きなことにする、という意味の章句があつた。一寸面白いと思う。新しい大学制度も既に大学の博士課程まででき上つて、一応完成の域に達した。変革とか躍進とかの時期を過ぎて、今はこの与えられたワクの中で日本の実状に適するように制度の内容を充実して行く時期である。いわば「小さいこと」を積み重ねて将来大きく盛り

上ることを期待すべき時であろう。このような意味で私は、特に昭和三十二年度と限定して、大方の刮目を乞うような抱負をもつていない。唯その積み重ねようとする二、三の小さなことがらを記して、編集者の希望に対えよう。

先づ今学年度も、学生の實力をつけることに一段の努力を払い度い。とりわけ従来問題とされている語学については一般教育委員会と協力して、新しい外国語科目を増設し、クラス分けを多くして一クラスの学生数をより少くすることにしたい。また同じ趣旨に基いて、今年度入学生から、教養課程における

× × ×

所定単位の外国語を修得しなければ、専門課程における外国書購読の科目の履修を許さないことにした。後の措置は、新制大学における単位制度の原則に幾分反するようであるが、我国の実情からは、このような方法が、学生に語学の力をつけ、専門課程に入つてからの勉強を、より効果的にする為めに必要である、と考えられるからである。

次にこの上とも学部の学的水準を高めるために微力を致し度い。このようない方は確かに語弊があるが、例えば教授その他研究に従事する人達の雑務をできるだけ少くし、各自の研究に専念できるような体制の確立に、一步を進め度いということである。また経済学部においては、従来純粹理論の面における研究に若干弱点があつたように考えられるので、今後この方面のスタツフを補強し（既に今年度の新スタツフの採用においてこの方向に踏み出している）、できれば特定の題目について、歴史・政策面の研究者との共同研究が行われるような氣運に進め度いと念願している。斯くて学部全体のスタツフがそれぞれ研究領域や立場を異にしつつ、しかも互いに相補い合つて、そこに渾然たる、そして着実な學風を創り出すことに努め度い。これは大きな理想であるが、その実現への小さな礎石を一つ二つ積み重ねるのが、今年度におけるわれわれの課題であると考えている。

× × ×

2

文学部長 壺井義正



「外には学問的業績をあげ、内には教育成果を擧す。」これが歴代

部長の易らぬ抱負であらう。学界への貢献は教授個人の努力に俟つが、学部としては学会の開催がある。本年度文学部で開催予定の学会は、全国的なものとしては心理学会・仏文学会・俳文学会・道学会の四学会。地方的な学会は可成の数に上る見込である。尚学位に関しては本年度に入つて既に三件が相次いで文部大臣より認可され三人の文学博士を出した、目下審査請求の論文が一件提出されている。

教育成果昂揚の問題に関しては、昨今学の内外に教授陣要の強化が叫ばれ、萬人の注目がこの一事に集中、教育の振興は教授陣強化の一事にあるかの様に論ぜられているが、事は左程に簡単ではない。即ち教授数の増加も必要ながら他方面教科の整理充実、研究指導の徹底、履習方法の改善等日進月歩すべき問題は多い。昨年度後半から学則改正に並行して

部内に学科整備委員会を設け種々検討を加へているが目的は各学科の教科の整理充実にある。文学部総体のスケールは変へたいとしても各学科間の不均衡を是正し疎漏のない体勢を完成したい、その為に可成の教科目の増減を必要とするであらう。近く結論を得る予定である。履習方法の改善については幸ひ理事者の努力により校舎その他の整備も整つたので、この際学生をして「履習させる」より「履習する」態度に進めたい。静かな

昭和三十二年度の抱負と展望

環境で落つて向学心を燃え上らせる様になしたものである。一般教養に於て語学力強化の為に本年度初めた組合けの増加、独仏の外に中国語・露語・西語の第二外国語の増強は年来の抱負乍らこの問題の一解決と自信している。語学の夏期大学開設も計画中で何れ一組五〇名の語学教室が実現することと思ふ。教授陣の充実については既に教授一、専任講師五の新任、教授一助教授三の昇格を見た尚二その充員を計画中である。内外両面への抱負は大きく、極力実現に努力したい。多方の御助力と御忠告を切望する。

商学部長 賀屋俊雄



昭和卅二年度に對する商学部の抱負如何と、先づ申述べね

ばならぬことは、我商学部の使命なるものは、十年前新制大学として発足の時既に確定を見たものである商学の府としては学界に於ける指導的地位の獲得、門を出する学徒のすべては、これに期待する社会の信に報ゆるに値するものたること、これがわれわれの守り來つた至上の使命であつたので、刻々の努力もそのすべてがこの方針に注がれて來たのである。於茲、本年度に於ける吾人の抱負別言すれば実現せんとするわれわれの計画は、述上の線から逸脱する何ものでもあり得ない。所謂抱負として發表し得べきものは、大向の喝采に値するが如き派手なものでもなく、実現性に乏しき壯語でもない、極めて地味なものであつて巻頭を飾るに足るべき読み榮ある何ものでもないことを予め御断りする。

われわれの計画する第一のものは、商学部学科課程の全面的検討と時代の要求に應ずべき改正である。その詳細に関しては、今茲に發表を差控えるのであるが既に部内委員の手によつて商学部独自の構想に基いて慎重に検討研究中である。現在の学科課程は爾來若干の更改は行われたものではあるが、未だ以て旧套を脱

しないものがある、時代は原子力、オートメーション、経営面に於ける計算の機械化と進みつつある、一方、我国涉外関係は益々多面且複雑化に面しつつある、すべては学科課程の修正をわれわれに要求しつつある、本年度に於て教養課程に於て中国語、西班牙語、露西亜語が追加されたのは、商学部多年の要望が教養課程に見出された一露頭と見て差支なからう。此計画は他の学部との関連、学科担任の人の問題、予算上から可なりの制約を蒙るではあるが鋭意其実現に向つて進進しつつある。第二の事業は、専門学科としての外書講読を通じて学生の語学力向上強化である。数年前断行した教養課程に於ける外国語履修に関する厳しき制約は極めて顕著なる効果をおさめつつあることは周知の事実であるが、これをして益々完璧ならしめんがため、或は組みわけにより或は数次に亘る考查の實行によつて教授方面に關し一大刷新を行わんとしている。第三は、校長推薦による優良学生の確保である、本年初に於て、既にこれを敢行したのではあるが、單なる書面審査によるには非ず、英語及び作文の筆記試験に加えて受験者全部に亘り、面接及び口頭試問を行つたのである。その實行には多大の時と労力を要したことであつて、これを厭わず優良学生の確保に努めんとした我学部の決意に対しては、本学当局に於ても意のあることを諒とせられて支持あられんことを祈つて止まない。

以上簡単ながらわれわれの欲するところの一端を披露してお尋ねに應ずる次第である。

日本におけるリルケ文献 (下)

天野敬太郎

D 評論、その他

Worswede. 1903.

○風景画論

三笠書房 二六六頁 A5

友幸訳 昭六10

○風景画論

創元社(創元文庫) リルケ選集 二〇〇頁 A6 昭六10

Auguste Rodin. 1907.

○ロダン

石中 象治訳 昭五8

○現代世界文学全集(新潮社) 6

第一節 (新潮文庫) 二六頁 A6 昭六1

○(岩波文庫) 二九頁 A6 昭六6

○人文書院 一三〇頁 B6 杉形 昭三12

(研究) リルケのアウグスト・ロダン論 茅野 蕭々 大七1

思潮 第二卷一号 中 昭六1

新潮社 風景について 大山 友幸訳 昭六1

ウオルプスヴェーデ 谷 友幸訳 昭六1

体験 富士川 英郎訳 昭六1

人形について 高橋 義孝訳 昭六1

小品

○リルケ選集(新潮社) Ⅲ 昭六12

○風景について 大山 友幸訳 昭六12

○ウオルプスヴェーデ 谷 友幸訳 昭六12

○体験 富士川 英郎訳 昭六12

○覚書 佐藤 晃一訳 昭六12

○若き一詩人への手紙 佐藤 晃一訳 昭七12

○地平社 二二六頁 B6 昭七12

○(角川文庫) 一八〇頁 A6 昭七10

ダヴィッド社 一七四頁 昭三6

○若き詩人への手紙「若き女性への手紙」 高安 国世訳 昭三12

養徳社 二七三頁 B6 昭六1

○(新潮文庫) 一〇三頁 A6 昭六1

若き一詩人への手紙 武田 昌一訳 昭三9

○リルケの手紙(芝書店) 昭三9

(研究) 「若き詩人に送れる手紙」に寄せて 阿部 六郎 昭四4

カンタニエン 第一一冊 昭四4

Briefe an eine junge Frau. 1930. 若き女性への手紙 高安 国世訳 昭六1

○若き詩人への手紙 武田 昌一訳 昭三9

若き一婦人への手紙 武田 昌一訳 昭三9

○リルケの手紙(芝書店) 昭三9

Lettres à Rodin. 1931 若き一詩人への手紙 武田 昌一訳 昭三9

○ロダンへの手紙 祖川 孝訳 昭三10

○実業之日本社 二三四頁 四六 昭三10

○河出書房(市民文庫) 一六頁 昭三10

○節に寄せる手紙―彫刻家ロダンへの手紙 佐々木斐夫、長谷川四郎訳 昭三11

みすず書房 二九頁 B6 昭三11

Über Gott, Zwei Briefe. 1933. 神について 大山 定一訳 昭三9

養徳社 一〇四頁 B6 昭三9

Briefe aus Muzot, 1921-1926. 1935. ミュンツトの手紙 高安 国世訳 昭三10

甲鳥書林 高安国世、富士川英郎訳 昭三10

○同 養徳社(リルケ書簡集5) 昭三6

Lettres françaises à Meinie, 1919-1922. 1950. 愛の手紙 矢内原伊作、富士川英郎訳 昭三10

三笠書房 三三六頁 B6 昭三7

三笠書房 三三六頁 B6 昭三6
Correspondance Rilke-Gide, 1909-1926. 1952. 孤独と友情の書―往復書簡 アンドレ・ジイド、富士川英郎、原田義人訳 三三六頁 B6 昭六11

○セザンヌ―書簡による近代画論 大山 定一訳 昭六6

人文書院 三四頁 B6 昭六6

リルケの手紙 大山 定一訳 昭二2

作品 第六卷二号(五八) 昭二2

神について―若き一労働者の手紙 大山 定一訳 昭三6

○世界文学 第二号 昭三6

○現代世界文学全集(新潮社) 6 昭六1

○リルケ選集(新潮社) Ⅲ 昭六12

未発表の手紙 片山 敏彦訳 昭三5

世紀 第一卷二号 昭三5

リルケとロマン・ロランとの交流―往復書簡(一九一三年) 山口 三夫訳 昭三5

窓 第一号 昭三5

リルケの手紙 堀 辰雄訳 昭二3

四季 堀 辰雄訳 昭二3

○女子日記(河出書房) 巴里の手紙 堀 辰雄訳 昭二57

堀辰雄全集 第四卷 同上 昭元9

リルケ書簡(ロダン宛) 堀 辰雄訳 昭二6

四季 第八号 堀 辰雄訳 昭二8

○堀辰雄全集(新潮社) 第六卷 堀 辰雄訳 昭二8

フレッドの風景 堀 辰雄訳 昭二7

十月 堀 辰雄訳 昭二7

○女子日記(河出書房) 堀 辰雄訳 昭二7

○堀辰雄全集(新潮社) 第四卷 堀 辰雄訳 昭元9

或女友達への手紙 堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

堀 辰雄訳 昭元9

四季 第八号 昭二六
 ○雉子日記(河出書房) 昭五七
 ○堀辰雄全集(新潮社)第四卷 昭元九
 ドウイノ悲歌についての手紙 堀 辰雄訳 昭三六
 四季 再刊号 堀 辰雄訳 昭三八
 ○薔薇(角川書店)ドウイノ 昭元九
 ○堀辰雄全集 第四卷 同上 昭元九
 心の仕事を―或未知の友人への手紙 堀 辰雄訳 昭元九
 ○薔薇(角川書店) 堀 辰雄訳 昭元九
 ○堀辰雄全集(新潮社)第四卷 堀 辰雄訳 昭元九

F リルケ文獻
 1 邦人著作 (五十音順)
 ○リルケ研究号(四季 第八号) 昭二六
 四季社 菊判 昭二六
 ○リルケ特集(窓 第一号) 昭三六
 (鎌倉)窓の会 二三頁 A5 昭三六
 リルケの天使の世界 会津 伸 昭三九
 美学 第七卷二号 昭三九
 リルケ ドイツ文学 第七号 生野 幸吉 昭三九
 ライネル・マリア・リルケと日本 上村 清延 昭三九
 文学 皇国文学 第三号 昭三九
 リルケに於ける日本的なもの 同上 昭三九
 文庫 第一卷一〇号 植村 敏夫 昭三六
 リルケの素描 四季 第二八号 昭三六
 リルケの世界をめぐる 江口 榛一 昭三九
 現代詩 第三卷八号 昭三九
 神々と神と 四季 第五号 遠藤 周作 昭三九

リルケについて 大島 博光 昭三六
 詩 神 第一号 昭三六
 リルケ雑記 大山 定一 昭三六
 新潮 第三五卷一五号 昭三六
 ○リルケ雑記(創元社) 昭三六
 ○リルケの薔薇(創元社) 昭三六
 近代における芸術の理念 同 昭三六
 文学 第一卷一〇号 昭三六
 ○文学ノート(秋田屋) 昭三六
 リルケの薔薇 同 昭三六
 婦人公論 第三二卷七号 昭三六
 ○リルケ雑記(創元社) 昭三六
 ○リルケの薔薇(創元社) 昭三六
 清らかさ、愛の無限―リルケのみた 同 昭三六
 女性 同 昭三六
 婦人朝日 第二卷二号 昭三六
 ○リルケ雑記(愛の女たち) 昭三六
 ○リルケの薔薇(同上) 昭三六
 ○リルケ雑記 同 昭三六
 創元社(百花文庫)一四七頁 昭三六
 リルケの生涯について 同 昭三六
 新文学 第五卷六号 昭三六
 ○リルケの薔薇 同 昭三六
 創元社 一四七頁 B6 昭三六
 リルケの生涯と作品 同 昭三六
 ○現代世界文学全集(新潮社)6 昭三六
 ○現代宗教講座(創元社)第一卷 同 昭三六
 人はなぜ宗教を求めるか 昭三六
 リルケの言葉から 岡谷 公二 昭三六
 馬酔木 第二九卷六号 昭三六
 訳詩の思ひ出 尾崎 喜八 昭三六
 窓 第一号 昭三六

リルケへの対決 田木 繁(笠松一夫) 昭三六
 詩と真実 創刊号 昭三六
 リルケに於ける「物」 同上(同) 昭三六
 詩と真実 第三号 昭三六
 リルケへの対決 笠松 一夫 昭三六
 浪速大学紀要 人文社会科学 第一卷 昭三六
 カタリナ・キッペンベルグ 同 昭三六
 の評論にふれて 同 昭三六
 同 上 第二卷 昭三六
 作品の死と現実の死 同 昭三六
 大阪府立大学紀要 人文社会科学 学 第四卷 昭三六

リルケの影 片山 敏彦 昭三六
 四季 第八号 昭三六
 ○リルケ(角川書店) 昭三六
 ライナー・マリア・リルケ 同 昭三六
 ○二十世紀思想 第四卷 昭三六
 ○リルケ(角川書店) 昭三六
 ヴァリスのリルケ 同 昭三六
 四季 第四四号 昭三六
 ○リルケ(角川書店) 昭三六
 リルケの使命 同 昭三六
 文庫 第一卷九号 昭三六
 ○心の遍歴(中央公論社) 昭三六
 ○リルケ(角川書店) 昭三六
 ○詩と友情 三笠書房 昭三六
 リルケ論―新しい諧和 同 昭三六
 四季 第五号 昭三六
 ○リルケ(角川書店) 昭三六
 リルケの孤独 同 昭三六
 次元 第一卷一〇号 昭三六
 ○リルケ(角川書店) 昭三六

○リルケ 同 昭三六
 角川書店 三三頁 B6 昭三六
 光る水脈(リルケ伝) 同 昭三六
 群像 第三卷一二号 昭三六
 リルケ(芸術家の部屋) 同 昭三六
 芸術新潮 第一卷九号 昭三六
 ヴァレのリルケ 同 昭三六
 ○リルケ果樹園(人文書院) 昭三六
 詩人の態度―ライナー・マリア・リルケの場合 加藤 周一 昭三六
 文学51 第一卷一〇号 昭三六
 ○現代詩人論(アテネ新書) 昭三六
 パリとリルケ 河盛 好藏 昭三六
 文体 第二卷二号 昭三六
 ○ふらんす手帖(生活社) 昭三六
 リルケと語る 同 昭三六
 文庫 第一卷八号 昭三六
 ○ふらんす手帖(生活社) 昭三六
 芸術による芸術の克服―リルケのこころの故郷について 岸田 晩節 昭三六
 ○ドイツ文学における悲劇性と その超克(都文堂) 昭三六
 リルケに何を学ぶか 黒田 三郎 昭三六
 VOU 第三四号 昭三六
 リルケに触れて―堀さんに 香西 照雄 昭三六
 万緑 第四〇号 昭三六
 若きリルケをおもふ 古賀 剛 昭三六
 蠟人形 第一二卷二号 昭三六
 谷友幸著「リルケ伝」によせて 同 昭三六
 読書倶楽部 第四卷三号 昭三六
 リルケ研究の問題点 小島 衛 昭三六
 世界文学 第六号 昭三六
 リルケへの郷愁の日 小柳 俊正 昭三六

一 座 昭三11
 神への成熟、リルケのこと 坂本 越郎 昭三11
 ○詩について(築地書店)
 リルケに就て 笹沢 美明 昭三12
 行 動 昭三12
 ○リルケの愛と恐怖(宝文館)昭三10
 リルケ小論 同 昭三3
 作 品 第六卷三号(五五)
 リルケの家系 同 昭三5
 四季 第八号
 ○リルケの愛と恐怖(宝文館)昭三10
 作品と作家の性格―リルケの人格に
 ついて 同 昭三10
 作 品 第六卷一〇号(六六)昭三10
 ○リルケの愛と恐怖 同 昭三10
 宝文館 一六頁 B 6
 リルケ語り―在パリ 笹本 駿二 昭三2
 人間 第六卷二号 昭三2
 ライナー・マリア・リルケ 志波 一富 昭三1
 ○二十世紀の世界文芸(理想社)
 リルケ 同 昭三5
 理 想 第二七六号 昭三5
 リルケと人生 白井健三郎 昭三3
 綜合文化 第二卷三号 昭三3
 リルケの世界 瀬木 慎一 昭三12
 近代文学 第九卷一二号 昭三12
 リルケ巡礼 高橋 健二 昭三11
 心 第六卷一〇号 昭三11
 日本的リルケの周辺 高橋 宗近 昭三56
 日本未来派 第三一四号 昭三56
 ライナー・マリア・リルケ 高橋 義孝 昭三4
 蠟人形 第一二卷四号 昭三4
 ○マン、ヘッセ、カロツツァ 昭三8
 ○現代ドイツ文学(要書房) 昭三4
 リルケ 高安 国世 昭三7
 ○若き日のために(ドイツ文学
 断想)(七丈書院) 昭三7
 一筋の道 同 昭三4
 ○新らしき力としての文学 昭三4
 リルケと音楽 竹内 豊治 昭三3
 音楽芸術 第九卷三号 昭三3
 第一〇卷二、九号 昭三29
 人生のかたへを(リルケに就て) 武田 昌一 昭三12
 カスタニエン 第四冊 昭三12
 リルケ雑記 同 昭三12
 生活 第一卷一号 昭三12
 ライナー・マリア・リルケ年譜 谷 友幸 昭三10
 ○神様の話(白水社) 昭三10
 詩人の故郷 同 昭三10
 四季 第五四号 同 昭三10
 孤独の作家リルケ 同 昭三10
 文庫 第一卷一号 同 昭三10
 死の眼 同 昭三12
 文庫 第一卷一〇号 同 昭三12
 ○リルケ伝 A 5 同 昭三12
 創元社 三三頁
 ○リルケ 三三頁 B 6 同 昭三8
 新潮社(生ける思想叢書)
 新潮社 三三頁 B 6 同 昭三8
 ○リルケ 三三頁 B 6 同 昭三8
 弘文堂(アテネ文庫) 六頁 昭三10
 リルケ・ノオト 谷田 昌平 昭三14
 第一四三―一四六号 昭三14
 リルケ小論 青 銅 第一号 昭三11
 ライナー・マリア・リルケの芸術 茅野 薫々 昭三7
 思潮 第一卷三号 大六7
 リルケの見たる神、自然その他 同 大六10
 思潮 第一卷六号 同 大六10
 ライナー・マリア・リルケ 同 昭三3
 ○リルケ詩抄(第一書房) 昭三3
 リルケについて 同 昭三6
 独逸文学 第二輯 昭三6
 ライナー・マリア・リルケ 同 昭三11
 ○世界文学講座 第八卷 昭三11
 環境と魂の交流 鼓 常良 昭三11
 文庫 第一卷九号 昭三11
 二人の詩人 手塚 富雄 昭三12
 馬酔木 第三〇卷一二号 昭三12
 リルケ覚え書 同 昭三8
 世 紀 第一七号 昭三8
 リルケ 同 昭三10
 ○文学講座(筑摩書房)第三卷 昭三10
 リルケの短篇小説について 豊永 喜之 昭三12
 文庫 第一卷一〇号 昭三12
 芸術の始源の問題とリルケ 中島 義生 昭三10
 拓殖大学論集 第一一〇号 昭三10
 愛と祈り(リルケの世界管見)奈切 哲夫 昭三9
 詩学 第一一〇号 昭三9
 リルケの天使 永野 藤夫 昭三12
 カトリック思想 第四号 昭三12
 晩年のリルケ 同 昭三5
 ソフィア 第一卷二号 昭三5
 「若きリルケ」を読み 中村 七郎 昭三9
 潮音 第三八卷九号 昭三9
 リルケとの出会 中村貞一郎 昭三5
 窓 第一号 昭三5
 別離の悲歌 芳賀 檀 昭三8
 エルンテ 第七卷三号 昭三12
 ○古典の親衛隊(富山房) 昭三12
 リルケの生のエチカ 同 昭三9
 文芸 第七卷九号 昭三9
 ○民族と友情(実業之日本社) 昭三2
 R M リルケ研究 同 昭三9
 詩風土 第一六号 昭三9
 ○R M リルケ(若草書房) 昭三9
 リルケと幼い心 同 昭三3
 教育社会 第三卷三号 昭三3
 ○R M リルケ 同 昭三9
 若草書房 一四七頁 B 6 昭三9
 天使の追憶―リルケにのみとるべき
 もの 同 昭三12
 短歌研究 第八卷一〇号 昭三12
 リルケの孤独 橋本 圭介 昭三12
 詩学 第三卷一〇号 昭三12
 リルケとロシア 長谷川四郎 昭三7
 近代文学 第九卷七号 昭三7
 リルケ論―彼の詩人的位置について 原田 義人 昭三10
 ○現代ドイツ文学論(福村書店) 昭三10
 仏蘭西に於けるリルケの文獻に就て 春山 行夫 昭三12
 詩と詩論 第二冊 昭三12
 リルケ略伝 富士川英郎 昭三8
 エルンテ 第七卷三号 昭三8
 実相観入 同 昭三7
 独逸文学 第二年二輯 昭三7
 リルケ雑記 同 昭三9
 新潮 第四〇年九号 昭三9
 リルケと「父の世界」 同 昭三12

- 悲劇の詩人リルケ 同 上
 午前 第三卷一号 昭三二
 リルケの肖像 同 上
 高原 第七輯 昭三七
 ○ライナー・マリア・リルケ―詩人の生涯 同 上
 南風書房 三六頁 B 6 昭三一二
 ○リルケ 同 上
 世界評論社 二六四、四頁 B 6 昭三二一
 リルケについて 同 上
 日本読書新聞 第五三三号 昭三三三
 死が立てゐる 同 上
 花冠 第三集 昭三二四
 新しいリルケ像―戦後のリルケ文獻について 同 上
 文学51 第一卷一号 昭三二五
 現代に於けるリルケ 同 上
 ○比較文学序説(河出書房) 昭三一二
 戦後のリルケ研究文獻 同 上
 ドイツ文学 第八号 昭三二五
 ○リルケ―人と作品 同 上
 東和社 二六三、五頁 A 5 昭三二九
 リルケ展覧会 同 上
 机 第三卷一〇号 昭三二一〇
 リルケの恋人たち 同 上
 現代世界文学全集月報 4 昭三二一
 リルケを読む人のために 同 上
 学 鐙 第五〇巻一号 昭三一
 日本におけるリルケ 同 上
 比較文学研究 第四号 昭三二七
 不安、空間、愛 藤田 美実 昭三二七
 明治大学人文科学研究所紀要 第四号 昭三二七
 ハッティンベルク「リルケとの愛の思い出」 藤原 定 昭三二七
- 近代文学 第八卷九号 昭三九
 リルケ・死について 同 上
 近代文学 第九卷七号 昭三二七
 寂寥詩人としてのリルケ 星野 慎一 昭三二八
 エルンテ 第七卷三号 昭三二七
 リルケの宗教性 同 上
 ○進路 昭三二七
 ○リルケ研究 河出書房 同 上
 第一部 若きリルケ 五六頁 昭三二九
 第二部 昭三二七
 潮音 第三八卷一号 昭三二一
 リルケと日本 同 上
 潮音 第三八卷一号 昭三二一
 リルケと「貧」 同 上
 三田文学 第四三卷六号 昭三二八
 略 同 上
 伝 ○リルケ詩集(岩波文庫) 昭三二四
 リルケ雑記(手帳より) 堀 辰雄 昭三二四
 文芸 第三卷四号 昭三二四
 ○狐の手套(野田書房) リルケ 昭三二四
 ○雉子日記(河出書房) リルケ とロダン 昭三二五
 ○薔薇(角川書店) 日時計の 昭三二六
 天使 ○堀辰雄全集 第四卷 同上 昭三二九
 天使 堀辰雄全集 第四卷 同上 昭三二九
 リルケ年譜 同 上
 四季 第八号 昭三二六
 ○雉子日記(河出書房) 昭三二七
 ○薔薇(角川書店) 昭三二六
 ○堀辰雄全集(新潮社) 第四卷 昭三二九
 ミュンオの館 同 上
 帝国大学新聞 昭三二二
 ○雉子日記(野田書房) 続雉 昭三二五
 子日記 昭三二八
 ○雉子日記(河出) 同上 昭三二七
 ○堀辰雄全集 第三卷 同上 昭三二七
- 或外国の公園で 同 上
 知性 昭三二六
 ○雉子日記(河出書房) 昭三二七
 ○堀辰雄全集(新潮社) 第四卷 昭三二九
 挿話 同 上
 ○雉子日記(河出書房) 昭三二七
 ○堀辰雄全集(新潮社) 第四卷 昭三二九
 リルケ小伝 堀川 竜男 昭三二九
 文庫 第一卷一〇号 昭三二九
 Rainer Maria Rilke 松本 耿平 昭三二九
 書物展望 第一一巻九号 昭三二九
 偶言―リルケに就て 三好 達治 昭三二九
 現代世界文学全集月報 4 昭三二九
 詩人の形成―ライナー・マリア・リルケの六考察 最上 宏信 昭三二九
 金沢大学法文学部論集(文学篇) 第四号 昭三二九
 ライナー・マリア・リルケ 望月 市恵 昭三二九
 ○マルテの手記(岩波文庫) 昭三二九
 手紙の誠実さとリルケについて 本野 亨一 昭三二九
 カスタニエン 第一一冊 昭三二九
 現代思想 森 鷗外 昭三二九
 太陽 第一五巻一三三号 明三二一〇
 ○鷗外全集 第一三巻 大二三三
 ○鷗外全集 著作篇第一六卷 昭三二九
 ○同 第二〇巻 昭三二九
 リルケ小論 山田 博信 昭三二九
 文学行動 昭三二九
 リルケの行動原理 山根 正男 昭三二九
 新批評 第一号 昭三二九
 リルケにおける詩人の悲劇性 吉満 義彦 昭三二九
 創造 昭三二九
 ○詩と愛と実存(河出書房) 昭三二九
 ○同(角川書店) 昭三二九
 リルケ、詩作の速度 吉村 真司 昭三二九
 詩学 第六号 昭三二九
- 星野慎一著「若きリルケ」富士川英郎著「リルケ―人と作品」吉村博次 昭三二四
 近代文学 第八卷四号 昭三二四
 リルケ素描 同 上
 近代文学 第九卷七号 昭三二七
 最近のリルケ研究文獻抄 同 上
 文庫 第一卷一〇号 昭三二七
 2 欧人著作(ABC順)
 ○ライナー・マリア・リルケ アンドレアス・サメロ、土井虎賀寿訳 筑摩書房 二五〇頁 B 6 昭三二九
 リルケの墓をたずねて ジェラール・パウエル、滝口修造訳 文庫 第三卷九号 昭三二九
 リルケの思ひ出 カロツサ、古松貞一訳 カスタニエン 第六冊 昭三二九
 コゴト 第五三三号 昭三二九
 ライナー・マリア・リルケ P・デクロオーブ、伊吹武彦訳 ○リルケ詩集(創元社) 昭三二八
 ○リルケとの愛の思い出 ハッティンベルク、富士川英郎、吉村博次訳 新潮社 三五頁 B 6 昭三二九
 ライナー・マリア・リルケの死に就いて E・ジャルウ、折田 学訳 詩と詩論 第七冊 昭三二九
 リルケの使命 同上、辻野久憲訳 四季 第八号 昭三二五
 ケリルの死 同上、真鍋良一訳 カスタニエン 改巻第二号 昭三二九
 ○リルケの最後の友情 同上、渡辺一夫、原田義人訳 人文書院 二七頁 B 6 昭三二九

リルケの思ひ出 カスナア、大山定一訳 昭三九
○神について(養徳社) 昭三九
リルケ 同上、大山定一訳 昭三九
○神について(養徳社) 昭三九
○リルケ K・キッペンベルク、芳賀 檀訳
人文書院 二四頁 B6 昭三九
○リルケと共に ルー・アルベル・
ラザール、高安国世、野村 修訳
新潮社 二六頁 四六判 昭三九
ライネル・マリア・リルケ
アルベルト・ゼーレルゲル、笹沢美明訳
詩と詩論 第五冊 昭四九
リルケの思出 トウルン・ウント・
タクシス侯爵夫人、富士川英郎訳
四季 第七一七九号 昭二九
○リルケの思ひ出 同上、富士川英郎訳
養徳社 三〇三頁 B6 昭三九
(新潮文庫) 二七三頁 A6 昭三九
ライナー・マリア・リルケに
ポオル・ヴァレレイ、河盛好蔵訳
○ヴァレレイ全集 第一〇巻 昭二六
Rilkes Frömmigkeit Leopold Winkler
ブルンネン 第五号 昭二六

○リルケ―人と詩人 ノーラ・ウイー
デンブルック、塚越 敏、鈴木重吉訳
筑摩書房 四三頁 A5 昭二六
リルケの少年時代
パウエル・ツエッヒ、吉村貞司訳
文学汎論 第一〇九号 昭二九

3 人との関係(邦人五十音順)
利玄とリルケ 片山 敏彦 昭二五
短歌研究 昭二五
○心の遍歴(中央公論社) 昭二五
○リルケ(角川書店) 昭三〇

R M リルケと芭蕉 芳賀 檀 昭三九
鹿火屋 第三六一号 昭三九
○リルケとドゥワーゼ 高橋 重臣 昭三九
天理大学学報 第一七輯 昭三九
リルケとデュメル 茅野 蕭々 昭三九
詩歌 第四卷一〇号 昭三九
ゲオルゲとリルケ 青山 郊汀 昭二七
独逸文学 第三年二輯 昭二七
ゲオルゲとリルケ 小島 貞介 昭三一
独逸文学 第一年四輯 昭三一
ゲオルゲとリルケ―芸術家と神の
問題 水上 英広 昭三九
高 原 第四輯 昭三九
ゲートとリルケ 片山 敏彦 昭二八
新潮 第三九年八号 昭三〇
○リルケ(角川書店) 昭三〇
ゲートとリルケ 星野 慎一 昭三〇
○ゲートと現代(小牧健夫、手
塚富雄編、大日本雄弁会) 昭三〇
ジイドとリルケ 笹沢 美明 昭三〇
○リルケの愛と恐怖(宝文館) 昭三〇
ハイデッカーのリルケ論 竹内 豊治 昭三二
実 存 第二号 昭三二
ハイデガーとリルケ 中島 義生 昭三二
○倫理学年報(有斐閣)第四集 昭三二
リルケとホフマンスタアル
マールホルツ、道本清一郎訳
文 庫 第三卷八号 昭二八
リルケとキルケゴール 古田 光 昭三三
新批評 第三年五号 昭三三
二つの人形観―クライストとリルケ 奥田 賢 昭三三
浪速大学紀要(人文・社会科
学) 第二号 昭三三
知性について(トオマス・マンとリ
ルケ) 大山 定一 昭三一

○リルケの思ひ出 同上、富士川英郎訳
養徳社 三〇三頁 B6 昭三九
(新潮文庫) 二七三頁 A6 昭三九
ライナー・マリア・リルケに
ポオル・ヴァレレイ、河盛好蔵訳
○ヴァレレイ全集 第一〇巻 昭二六
Rilkes Frömmigkeit Leopold Winkler
ブルンネン 第五号 昭二六

○リルケ―人と詩人 ノーラ・ウイー
デンブルック、塚越 敏、鈴木重吉訳
筑摩書房 四三頁 A5 昭二六
リルケの少年時代
パウエル・ツエッヒ、吉村貞司訳
文学汎論 第一〇九号 昭二九

3 人との関係(邦人五十音順)
利玄とリルケ 片山 敏彦 昭二五
短歌研究 昭二五
○心の遍歴(中央公論社) 昭二五
○リルケ(角川書店) 昭三〇

R M リルケと芭蕉 芳賀 檀 昭三九
鹿火屋 第三六一号 昭三九
○リルケとドゥワーゼ 高橋 重臣 昭三九
天理大学学報 第一七輯 昭三九
リルケとデュメル 茅野 蕭々 昭三九
詩歌 第四卷一〇号 昭三九
ゲオルゲとリルケ 青山 郊汀 昭二七
独逸文学 第三年二輯 昭二七
ゲオルゲとリルケ 小島 貞介 昭三一
独逸文学 第一年四輯 昭三一
ゲオルゲとリルケ―芸術家と神の
問題 水上 英広 昭三九
高 原 第四輯 昭三九
ゲートとリルケ 片山 敏彦 昭二八
新潮 第三九年八号 昭三〇
○リルケ(角川書店) 昭三〇
ゲートとリルケ 星野 慎一 昭三〇
○ゲートと現代(小牧健夫、手
塚富雄編、大日本雄弁会) 昭三〇
ジイドとリルケ 笹沢 美明 昭三〇
○リルケの愛と恐怖(宝文館) 昭三〇
ハイデッカーのリルケ論 竹内 豊治 昭三二
実 存 第二号 昭三二
ハイデガーとリルケ 中島 義生 昭三二
○倫理学年報(有斐閣)第四集 昭三二
リルケとホフマンスタアル
マールホルツ、道本清一郎訳
文 庫 第三卷八号 昭二八
リルケとキルケゴール 古田 光 昭三三
新批評 第三年五号 昭三三
二つの人形観―クライストとリルケ 奥田 賢 昭三三
浪速大学紀要(人文・社会科
学) 第二号 昭三三
知性について(トオマス・マンとリ
ルケ) 大山 定一 昭三一

○リルケの思ひ出 同上、富士川英郎訳
養徳社 三〇三頁 B6 昭三九
(新潮文庫) 二七三頁 A6 昭三九
ライナー・マリア・リルケに
ポオル・ヴァレレイ、河盛好蔵訳
○ヴァレレイ全集 第一〇巻 昭二六
Rilkes Frömmigkeit Leopold Winkler
ブルンネン 第五号 昭二六

○リルケ―人と詩人 ノーラ・ウイー
デンブルック、塚越 敏、鈴木重吉訳
筑摩書房 四三頁 A5 昭二六
リルケの少年時代
パウエル・ツエッヒ、吉村貞司訳
文学汎論 第一〇九号 昭二九

3 人との関係(邦人五十音順)
利玄とリルケ 片山 敏彦 昭二五
短歌研究 昭二五
○心の遍歴(中央公論社) 昭二五
○リルケ(角川書店) 昭三〇

R M リルケと芭蕉 芳賀 檀 昭三九
鹿火屋 第三六一号 昭三九
○リルケとドゥワーゼ 高橋 重臣 昭三九
天理大学学報 第一七輯 昭三九
リルケとデュメル 茅野 蕭々 昭三九
詩歌 第四卷一〇号 昭三九
ゲオルゲとリルケ 青山 郊汀 昭二七
独逸文学 第三年二輯 昭二七
ゲオルゲとリルケ 小島 貞介 昭三一
独逸文学 第一年四輯 昭三一
ゲオルゲとリルケ―芸術家と神の
問題 水上 英広 昭三九
高 原 第四輯 昭三九
ゲートとリルケ 片山 敏彦 昭二八
新潮 第三九年八号 昭三〇
○リルケ(角川書店) 昭三〇
ゲートとリルケ 星野 慎一 昭三〇
○ゲートと現代(小牧健夫、手
塚富雄編、大日本雄弁会) 昭三〇
ジイドとリルケ 笹沢 美明 昭三〇
○リルケの愛と恐怖(宝文館) 昭三〇
ハイデッカーのリルケ論 竹内 豊治 昭三二
実 存 第二号 昭三二
ハイデガーとリルケ 中島 義生 昭三二
○倫理学年報(有斐閣)第四集 昭三二
リルケとホフマンスタアル
マールホルツ、道本清一郎訳
文 庫 第三卷八号 昭二八
リルケとキルケゴール 古田 光 昭三三
新批評 第三年五号 昭三三
二つの人形観―クライストとリルケ 奥田 賢 昭三三
浪速大学紀要(人文・社会科
学) 第二号 昭三三
知性について(トオマス・マンとリ
ルケ) 大山 定一 昭三一

○リルケの思ひ出 同上、富士川英郎訳
養徳社 三〇三頁 B6 昭三九
(新潮文庫) 二七三頁 A6 昭三九
ライナー・マリア・リルケに
ポオル・ヴァレレイ、河盛好蔵訳
○ヴァレレイ全集 第一〇巻 昭二六
Rilkes Frömmigkeit Leopold Winkler
ブルンネン 第五号 昭二六

○リルケ―人と詩人 ノーラ・ウイー
デンブルック、塚越 敏、鈴木重吉訳
筑摩書房 四三頁 A5 昭二六
リルケの少年時代
パウエル・ツエッヒ、吉村貞司訳
文学汎論 第一〇九号 昭二九

3 人との関係(邦人五十音順)
利玄とリルケ 片山 敏彦 昭二五
短歌研究 昭二五
○心の遍歴(中央公論社) 昭二五
○リルケ(角川書店) 昭三〇

R M リルケと芭蕉 芳賀 檀 昭三九
鹿火屋 第三六一号 昭三九
○リルケとドゥワーゼ 高橋 重臣 昭三九
天理大学学報 第一七輯 昭三九
リルケとデュメル 茅野 蕭々 昭三九
詩歌 第四卷一〇号 昭三九
ゲオルゲとリルケ 青山 郊汀 昭二七
独逸文学 第三年二輯 昭二七
ゲオルゲとリルケ 小島 貞介 昭三一
独逸文学 第一年四輯 昭三一
ゲオルゲとリルケ―芸術家と神の
問題 水上 英広 昭三九
高 原 第四輯 昭三九
ゲートとリルケ 片山 敏彦 昭二八
新潮 第三九年八号 昭三〇
○リルケ(角川書店) 昭三〇
ゲートとリルケ 星野 慎一 昭三〇
○ゲートと現代(小牧健夫、手
塚富雄編、大日本雄弁会) 昭三〇
ジイドとリルケ 笹沢 美明 昭三〇
○リルケの愛と恐怖(宝文館) 昭三〇
ハイデッカーのリルケ論 竹内 豊治 昭三二
実 存 第二号 昭三二
ハイデガーとリルケ 中島 義生 昭三二
○倫理学年報(有斐閣)第四集 昭三二
リルケとホフマンスタアル
マールホルツ、道本清一郎訳
文 庫 第三卷八号 昭二八
リルケとキルケゴール 古田 光 昭三三
新批評 第三年五号 昭三三
二つの人形観―クライストとリルケ 奥田 賢 昭三三
浪速大学紀要(人文・社会科
学) 第二号 昭三三
知性について(トオマス・マンとリ
ルケ) 大山 定一 昭三一

○リルケの思ひ出 同上、富士川英郎訳
養徳社 三〇三頁 B6 昭三九
(新潮文庫) 二七三頁 A6 昭三九
ライナー・マリア・リルケに
ポオル・ヴァレレイ、河盛好蔵訳
○ヴァレレイ全集 第一〇巻 昭二六
Rilkes Frömmigkeit Leopold Winkler
ブルンネン 第五号 昭二六

○リルケ―人と詩人 ノーラ・ウイー
デンブルック、塚越 敏、鈴木重吉訳
筑摩書房 四三頁 A5 昭二六
リルケの少年時代
パウエル・ツエッヒ、吉村貞司訳
文学汎論 第一〇九号 昭二九

3 人との関係(邦人五十音順)
利玄とリルケ 片山 敏彦 昭二五
短歌研究 昭二五
○心の遍歴(中央公論社) 昭二五
○リルケ(角川書店) 昭三〇

R M リルケと芭蕉 芳賀 檀 昭三九
鹿火屋 第三六一号 昭三九
○リルケとドゥワーゼ 高橋 重臣 昭三九
天理大学学報 第一七輯 昭三九
リルケとデュメル 茅野 蕭々 昭三九
詩歌 第四卷一〇号 昭三九
ゲオルゲとリルケ 青山 郊汀 昭二七
独逸文学 第三年二輯 昭二七
ゲオルゲとリルケ 小島 貞介 昭三一
独逸文学 第一年四輯 昭三一
ゲオルゲとリルケ―芸術家と神の
問題 水上 英広 昭三九
高 原 第四輯 昭三九
ゲートとリルケ 片山 敏彦 昭二八
新潮 第三九年八号 昭三〇
○リルケ(角川書店) 昭三〇
ゲートとリルケ 星野 慎一 昭三〇
○ゲートと現代(小牧健夫、手
塚富雄編、大日本雄弁会) 昭三〇
ジイドとリルケ 笹沢 美明 昭三〇
○リルケの愛と恐怖(宝文館) 昭三〇
ハイデッカーのリルケ論 竹内 豊治 昭三二
実 存 第二号 昭三二
ハイデガーとリルケ 中島 義生 昭三二
○倫理学年報(有斐閣)第四集 昭三二
リルケとホフマンスタアル
マールホルツ、道本清一郎訳
文 庫 第三卷八号 昭二八
リルケとキルケゴール 古田 光 昭三三
新批評 第三年五号 昭三三
二つの人形観―クライストとリルケ 奥田 賢 昭三三
浪速大学紀要(人文・社会科
学) 第二号 昭三三
知性について(トオマス・マンとリ
ルケ) 大山 定一 昭三一

○リルケの思ひ出 同上、富士川英郎訳
養徳社 三〇三頁 B6 昭三九
(新潮文庫) 二七三頁 A6 昭三九
ライナー・マリア・リルケに
ポオル・ヴァレレイ、河盛好蔵訳
○ヴァレレイ全集 第一〇巻 昭二六
Rilkes Frömmigkeit Leopold Winkler
ブルンネン 第五号 昭二六

○リルケ―人と詩人 ノーラ・ウイー
デンブルック、塚越 敏、鈴木重吉訳
筑摩書房 四三頁 A5 昭二六
リルケの少年時代
パウエル・ツエッヒ、吉村貞司訳
文学汎論 第一〇九号 昭二九

学内報

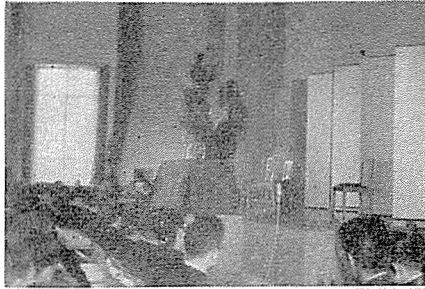
入学式 挙行

關西大學學部昭和三十三年度入學式

(新制大學となつてから十回目)は、四月十日

(水)一部は、経済学部、商学部午前十時より、法学部、文学部午後一時より千里山第一学舎講堂で、二部は各学部とも午後五時より天六学舎講堂に於てそれぞれ挙行、岩崎学長の訓示に続いて新入学生の宣誓が行われた。

なお、学校法人關西大學の設置する関係学校の入学

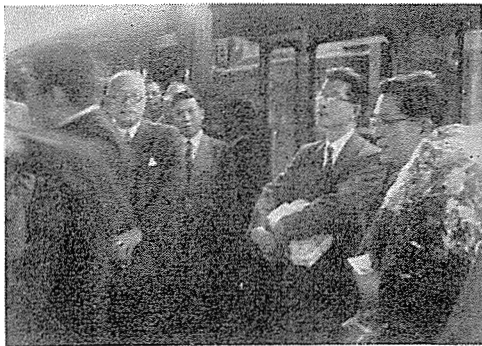


新入生に訓示する学長

式を待つ新入生



大阪駅頭の杉原、植野両教授



式も左の通り挙行された。

四月十二日 午前十時 大学院

四月六日 午前十時 第一高等学校

四月六日 午後一時 第一中学校

藤本教授帰学

昭和三十年度在外学術研究員として昨年五月渡欧した文学部藤本是教授は、ハイドルベルヒなど主としてドイツの大学で哲学を研究し、去る三月二十六日 SAS 機で羽田空港着、同三十一日朝大阪駅着無事帰学した。

杉原、植野両教授渡欧

経済学部杉原四郎、商学部植



石濱純太郎教授に

文学博士号授与

文学部石濱純太郎教授は、かねて本

学文学部教授会に論文を提出して博士

号を請求していたが、昨年十一月末の

教授会でパスし、三月十一日付をもつ

て文学博士号が授与された。

なお、博士号授与式は四月十三日

(主)千里山大学ホールで行われ、本学

役員、各学部長列席の下に、学長より

同博士に学位記が授与された。

なおまた、本学における文学博士号

授与の最初である。

(主論文題名)

「支那学論攷」(一篇)

(参考論文)

「蒙文讀頌統目録」

—蒙文田殊爾総目— (二篇)

「東洋学の話」 (二篇)

(略歴) 大阪市。明治四十四年東京帝

国大学文科大學支那文学科卒、大正

十二年泊園文庫漢学講師、同十三年

東洋語書籍調査のため欧州へ出張、

同十五年本学専門部講師、大阪高等

学校(漢文)及龍谷大学(史学)講師、

昭和四年本学文学部講師、同八年本

学第一予科講師、同十二年京都帝國

大学文学部講師、同二十一年大阪外

事専門学校講師、同二十四年本学教

授、同二十五年大学院兼務

(主著)「支那学論攷」、「浪華儒林

伝」、「富永仲基」

野郁太阿教授は、昭和三十三年度在外学術研究員として、四月二十六日(金)大阪駅十二時三十分「はと」号で出発、同二十九日午後九時 SAS 機で羽田空港より出発した。

なお、杉原教授は十九世紀欧州諸国の経済思想史の研究並びに現代各国の経済事情、社会科学研究状況視察のため、イ

ギリスを中心に欧州各国へ向い、また、植野教授は経営管理論、特に管理会計の理論とその実施状況に関する実証的研究のため、主としてイギリス及びアメリカに学ぶ予定である。

第二外国語増設開講

昭和三十三年度より本学では第二外国語、ドイツ語、フランス語の他に、スベ

イン語、ロシア語及び中国語を増設開講することになった。

一 高校長更送

關西大學第一高等学校長矢口家治氏退職のため、關西大學第一中学校長三島律夫氏が高等学校長兼務を命ぜられた。
なお、矢口家治氏は、關西大學第一高等学校校長を命ぜられた。

略歴(本学園関係のみ)

矢口家治 大正六年京大法律科卒、調査課長、庶務課長、生徒主事、学生課長等を歴任、理事、専務理事、高校長
三島律夫 大正十一年關大専門部商科卒、関大教諭、専門部講師、校友課長等を歴任、現在一中校長

人事異動

昭和三十三年三月十一日付

文学博士の学位を授く

教授 石濱純太郎

昭和三十三年三月三十一日付

關西大學第一高等学校長の職を解く

教諭 矢口家治

關西大學第一中学校長の職を解く

教諭 三島律夫

昭和三十三年四月一日付

關西大學第一高等学校校長を命ずる

矢口家治

關西大學第一高等学校校長に任じ關西大學

第一中学校長兼務を命ずる

教諭 三島律夫

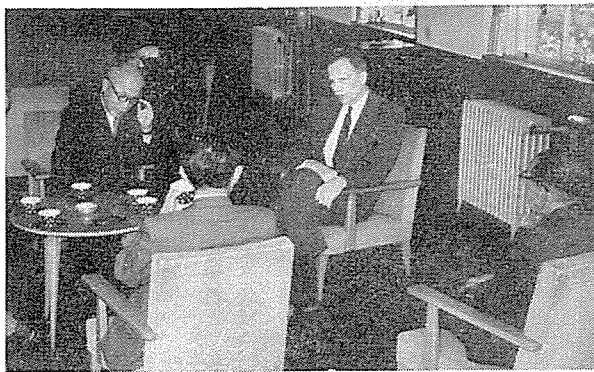
ロックフェリア財団

フアーズ博士来学

ロックフェリア財団人文科学部長C・B・フアーズ博士(Dr. Charles B. Fahs)は、四月十九日(金)午後二時来学、千里山大学ホールにて岩崎学長などと種々学問研究、特に歴史学の問題について懇談した。

出席者

岩崎学長、矢口理事、森川、堀、魚澄、原、横三各教授、田中秘書課長



懇談するフアーズ博士

昭和三十一年度卒業論文題名 (2)

文学部

史学科(総)

(五十首順)

江戸時代に於ける商人の家族道德思想 田中 隆

南北朝争乱に於ける国術領及び正税 辻 省三

ロシア革命に於ける革命思想の形式過程と歴史的背景 堂垣善太夫

天皇制の経済的基礎——皇室財産の分析 戸沢 博

飛騨三河に於ける一向一揆について 豊国 鍊三

項羽の研究 中島 芳彦

各時代に於ける関所の意義的変遷と目的 新星 正秀

近世の宿駅について 西本 善弘

応仁の乱発生の原因(特に農民一揆を中心として見る) 林 忠男

中世に於けるイギリス羊毛貿易の見解 樋口 拓

前方後円墳の築造と方位——特に畿内前方後円墳の方位について—— 樋口 昌徳

百姓一揆の形態分類に於ける変遷について 藤田 治

上代社会に於ける奴隷制度とその生活——奈良朝を中心として——

松井 隆雄

自由民権運動の展開とその階級的性格 美田 隆宏

江戸時代に於ける諸制度下の農民生活の展望 村尾 知己

イングランド革命に於ける急進的運動について 森 昌美

姫路城の歴史と同城に於ける縄張について 守谷 益生

江戸時代の風俗習慣について 山田 寅二

アメリカの独立戦争とアイルランド統治との関係 吉村 徹

新聞学科

一定職業集団内に於ける購読新聞の嗜好分析 浅井 明

広告の効果的方法 浅香 重望

資本主義下に於ける公共放送のあり方とその影響 青山 港

小都市に於ける高校生の新聞接近と理解 井川 清

広告の倫理 生間 六男

商業放送の広告効果 井上 透

我が国現行刑法に於ける新聞の名譽毀損及び侮辱について 今西 崇浩

映画の広告宣伝とその倫理について 井本 武

新聞文章の危険性(名誉毀損の適応)

嶺樞 弘

マス・コミュニケーションの対象である新聞と読者について 岩橋 秀行
我が国に於ける国際観光の宣伝活動 石見 有寿

新聞広告に於けるキャッチフレーズと文案 岩本 宏三

広告宣伝について 池本 孝重

現代マス・コミュニケーションに於ける新聞の地位について 井手 英雄
映画に於ける社会的役割及びその見解(マス・コミュニケーションとして) 上田 洋二

新聞文章の特質 梅田 忠彦

今後のマス・コミュニケーションの見透しについて 上野 賢治

広告の歴史の変遷 江島 一夫

マス・メディアとしての新聞の存在 価値 大門 康思

新聞報道の実際 大川 弘

紙面構成の造形表現について 岡田 淳一

CM(ラジオ広告)聴取者の心理的機制 荻野 元

商業新聞の報道素材作製に作用する力の要素について 奥田敬一郎

映画とテレビが一般大衆に与える影響力について 小倉 敏明

現代の新聞を批判する

表 寛治

我が国の機関紙活動 海保 康蔵
社会組織に於けるP・R広告の重要性について 金元 義明

新聞の見出しについて 鎌田 和男

テレビ放送の社会的影響の分析 神吉 正雄

新聞に於ける客観的事実の諸考察 鴨井 義夫

雑誌広告は如何にあるべきか 岸本 盾一

広告媒体の価値は如何にして説明できるか 北垣 嘉昭

宣伝に於ける新聞の重要性 北森卯一朗

現在社会に於ける新聞広告の傾向と役割 木村 充

新聞紙面論 工藤 章

世論の性質と構造 工藤 好孝

三大紙(朝日・毎日・読売)に於ける論説の比較、研究 黒岩 丈夫

現代社会に於ける映画の重要性について 鉄子 雅夫

新聞学科学生としてみた法律訴訟 河野 宏通

新聞の自由及び弾圧史論 小坂 和夫

現代に於ける広告批判 小島 信雄

商業新聞の魔術性 小谷口博行

ジャーナル批判の必要性について 児玉 勝弘

現代社会に於ける広告機能と広告倫理について 小林 高彦

商業放送に於ける娯楽番組とスポンサー 小林 二郎

新聞小説と読者 小林 勝

広告の道德的倫理について 木挽 正次

マス・コミュニケーションに於ける広告倫理の諸問題 近藤 義雄

放送の重要性 実城 実

マス・コミュニケーションに於ける世論と宣伝の相互性 白石弥久雄

マス・コミュニケーションに於ける新聞の「見出し」と読者について 庄中 康夫

近代広告の課題 島崎 清英

広告と生活の結びつき 小路 勝治

ジャーナリズムの本質 末吉 得俱

広告計画の為の準備的要素(基礎)と主要延体との結びつき 杉田 哲男

現在高校生に新聞は如何に読まれているか 鈴木 正宏

マス・コミュニケーションと新聞の使命 妹尾 正徳

新聞学に於けるニュース及び公示の性格論について 高間 昭郎

新聞広告の存在価値とその倫理 竹中 寛

新聞見出しの読者に与へる心理的作用 竹本 俊明

市場調査の実情と課題 田中 昭人

新聞広告とその効果 田中 悟

新聞の本質 立花 章邦

新聞に於ける案内広告の必要性 田中 稜

マス・コミュニケーション下に於ける商業広告と社会道義 土田庄太郎

日本新聞史観序説——現代新聞に於ける矛盾を分析—— 手嶋 敬三

宗教に於けるコミュニケーション 土井 弘行

最近の広告を分析してみても 土井 幸生

コミュニケーションの概念 土井 惇弘

我が国新聞見出しの表示性と圧縮性 土井原秀穂

新聞報道に於けるニュースの真実性について 殿勝 宏

マス・コミュニケーションに於ける広告の倫理と社会利益 富田 隆彦

現代マス・コミュニケーション論 富田 隆造

映画教育に於ける意義と諸問題 富山 宣男

新聞と名誉毀損について 鳥谷 清美

広告とラジオ 内藤 進敬

番組編成の自主性について 仲野 俊彦

現在の広告について——特にラジオ・テレビ—— 中村 悦章

マス・メディアとしての演劇

中村 忠法

宣伝広告の効果

中村 博典

新聞の変革と新時代の方向

中村谷勝美

新聞紙法変遷下に於ける明治自由民権運動の新聞弾圧について

渚 潤為

我が国に於ける世論形成のあり方と公衆

南部 宏

輸出振興に於ける広告のあり方及び意義

西川 孟

放送ニュースと新聞ニュース

西川 剛志

商業新聞に於ける反社会性

西田 浩洋

効果的な新聞広告作成についての研究

二宮 基

新聞に於ける商業主義

根来 通夫

CMの良否と効果

箸本 貞雄

新聞と名誉毀損

長谷 正雄

最近の新聞に於ける著名商品の説明

長谷川清人

広告を分析してみ

泰 喜好

民間放送の発展過程と役割

林 覚太郎

マス・コミュニケーションを媒体としての現代の新聞について

原 博彦

社会機能としての映画と群集心理

春名 靖介

我が国に於ける近代印刷文化の発展と特徴について

東川 勝

新聞と広告について

引地 忠恕

新聞と世論

藤井 隆

映画教育の現状と課題

藤岡 広年

マス・コミュニケーションと芸術の商品価値

古市 忠朗

大衆化せる商業放送と公共放送とそれによつて生ずる諸問題

細川 和夫

大衆社会とマス・メディア

細川 順治

近年の代表新聞社説の社会関係度と社説の諸問題(朝日・毎日)

前花 禎藏

マス・コミュニケーションに於ける新聞の役割

蒔田 暁一

テレビ放送の発展とその広告

榎岡 博司

輸出振興策としてのテレビPRエージ

松元 悟

不良映画と青少年とその対策

松本 治郎

群集と公衆

松本 卓造

放送教育の重要性

松本 照治

近代広告について

光吉 章一

ニュースと世論

宮下 清隆

ラジオ広告の特徴と効果について

宮武栄次郎

コーシャル・メッセージについて

宮辻 純一

現代報道写真論

宮野 友義

戦後に於けるイギリス新聞の問題

村井 武

——王立委員会の調査をもとに——

マス・コミュニケーションによる社会並びにその構成分子に与える影響

——社会学的、社会心理学的考察とその分析——

八木 秀夫

現在の報道源としての通信社について

柳沢 重郷

我が国に於ける新聞文章の変遷とその実例について

矢野 昭

現代新聞の論調批判

山岡 寛

社会構造から見たマス・コミュニケーションの媒体の動行について

山上 善章

教育映画としての記録映画の意義とその考察

山崎 雄司

公衆及び群集について

山田 信夫

テレビジョンの発展過程と将来

山本 英昭

新聞広告とその効果

山中 薫

新聞広告面の責任について

山本 景造

宣伝広告がマス・コミとして如何に大衆に作用するか

吉川 静夫

報道機関と社会との関連性

吉川 重男

新聞文章の報道性

吉原 益弘

広告について

米田 悦二

明治維新動乱期に於ける日本の新聞

若林 孝司

「活字」と「眼」との関係

渡辺 乙見

現代マス・コミュニケーションの有り方について

寺崎 隆実

社会構造の差異にともなう広告の役割とその将来

山崎 雅章

▼東洋文学科

儒教思想の一考察

味付 宗和

白楽天について

五十畑広明

左伝に於ける政治外交道徳

大宮 治下

唐代文学思想について

香川 公彦

詩経の国風篇について

角野 和弘

李白とその詩について論ず

木下 昌眺

杜甫伝(唐代の詩風と思想)

小池 且二

陶淵明について

阪口 実

孟子の思想研究

須藤 泰碩

晉唐小説について

高田 治

中国文字改革及び日本文学への影響について

辻義 正六

六朝時代の芸術について(書道を中心とす)

中川 泰一

中国新文学の特質について

西村 正

杜甫の人物観とその詩の特色

吉田 英哲

学生

文化 部

珠算部

四月十日から十三日まで小豆島土屋において合宿練習及珠算講習会を小、中学校で開催。

グリー・クラブ

四月三日、NHK第一放送を通じて十二時十五分よりコーラスを放送、広く市民に聞かせた。

ユネスコ研究部

三月十八日から二十一日の四日間、東京日本青年会館で行われた日本ユネスコ学生連盟全国委員会に出席、大いに当部の意見を主張した。なお本年度の全国大会は仙台ユネスコ会館において八月三十一日の四日間行われる。

学園座

四月十三日の新入生歓迎大会に「海の底の六人」を上演、新入生の絶讃をおびた。

関学定期戦(アイスホッケー)

に 四 連 勝

第六回開大、関学アイスホッケー定期戦は十二日午後七時より大阪難波リングで行われた。

本学は三十秒にして先取点をあげられたが、その後自分のペース引き込み、全員出足が速く、第一ピリオドまで松本の独走もあつて四点を取り、第二ピリオドで十八分に得点を上げ後半の関学の追込みを抑え四連勝し、通算成績は本学の四勝一敗一分となつた。

記録

関大7 (4-1-1) 4 関学
2-1-3

出場選手(本学のみ)

FW 藤井、松本、大橋、金谷、中川、吉田、岸見、阿部

OF 片桐、山田

GK 六野

応援団吹奏楽部

応援団吹奏楽部は四月四日より九日迄、福井地方に演奏旅行を行い、各会場に集まつた聴衆より絶讃を拍した。なお、演奏日程は次の通りである。

四日 大阪駅二十三時十分発

五日 午後一時三十分「だるま屋」百貨店屋上にて紹介演奏、同三時より約一時間に亘つて市中行進演奏。

六日 正午福井県庁前にて紹介演奏、午後三時半より武生市内を行進演奏、午後七時同市民館に於て演奏(聴衆約千七百名)

七日 午後七時より、福井市公会堂に於て演奏(聴衆千三百名)

八日 午後一時福井大学附属明道中学校講堂に於て全校生徒に演奏

(10頁より)

リルケとロダン

文芸 第三巻四号

文庫 第二三三号

文学界 第四卷一、二号

リルケとロラン

窓 第一号 蜷原 徳夫 昭三5

リルケとロマン・ロランとの交流

窓 第一号 山口 三夫 昭三5

聖フランチェスコとリルケ十字架

と清貧について 永野 藤夫 昭三5

声 第八八二号

スベンダーのリルケ論 村上 光彦 昭三5

ヴァレリーとリルケ 大島 博光 昭三10

詩学 第五卷九号

リルケとヴァレリー 河盛 好藏 昭三8

詩学 第一号

ヴァレリーとの接触 一 合田昭三郎 昭三12

愛知大学文学論叢 第二号 昭三12

「ユウパリノスとオルフォイス」覚書 高木 研一 昭三12

(新潟大学)人文科学研究 第四号 昭三12

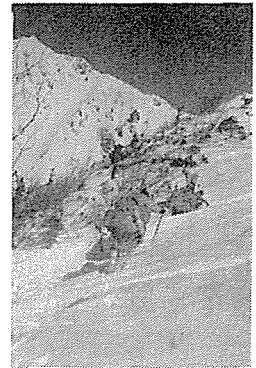
リルケとヴァレリー 村松 剛 昭元7

近代文学 第九卷七号

リルケとヴァレリーその交友関係 富士川英郎 昭三5

窓 第一号 片山 敏彦 昭三5

リルケとヴィルドラック 窓 第一号 昭三5



針の木岳に向う

隊員編成

〇縦走隊

チーフリーダー、浜田啓司(法三) 柳川哲夫(商三)

〇補給隊

チーフ隊長長崎高(リーター、福山剛(英三))

〇オ二隊(精鋭より槍ヶ岳へ)リーター、北出孝継(英三)

〇オ三隊(七倉尾根より船瀬原へ)リーター、桑田結(法三)

〇オ四隊(連見尾根よりキレット、不帰へ)隅田智(経三)

〇オ五隊(北出孝継(英三)) 櫻谷政博(経二)

〇オ六隊(石神玄治(経一))

昭和三十二年四月三十日発行

関西大学學報 第三〇二號

大阪府大淀区長柄中通二丁目二番地

編集者 久 井 忠 雄

発行人 大阪府北區川崎町三八

印刷所 株式会社 ナニワ印刷所

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番

電話(95)七二七〇番



校友 パツチ

校

友

校友会入会式

恒例の新卒業生を迎える入会式は、左記の通り多数代議員出席のもとに、卒業式に引続いて盛大に挙行された。

一、とき・ところ

短期大学部 三月十八日 午前十一時半

学部長・商 三月廿一日 午前十一時半

学部長・文 同 午後三時半

於 千里山才一学舎 講堂

一、次才

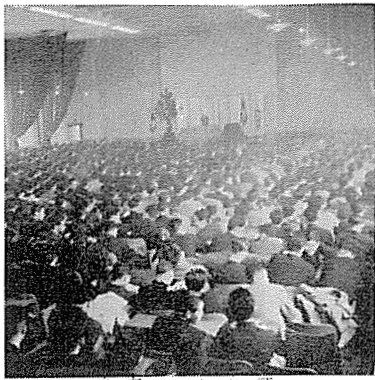
1. 開会の辞 司会者 坂本総務部副部長

2. 挨拶 長柄 副会長

3. 各部紹介 大月 会長

4. 記念品贈呈

5. 挨拶 久井専務理事



校友会入会式

6. 新入会員代表挨拶

短期大学部 樋渡 勝男
学部長・商 飯田 稔
学部長・文 丸岡 武
長柄 副会長

7. 閉会の辞

千里山昭七会総会

三月九日(土) 午後五時から日本橋の「とり菊」で千里山昭七会総会を、大阪府水道部長に榮転の久松鹿治氏の激励、警察官退官の洪江繁夫氏の慰労を兼ねて開催。

宴にはいるや、時の過ぎるのを打忘れて懐旧談に花を咲かせ、母校発展の喜びをわかし、最後に万才三唱後閉会、盛大な総会であつた。

出席者

久松鹿治 洪江繁夫 沢山宗海 鈴木勇男 丸山 喜三造 行俊喬 吉木由雄 米田恒治 竹内幸一郎 山下邦宣 筒井玉藻 越智比古市 谷口奈良男 藤原忠義 西尾専太郎 浅井文夫 京本善英 岩佐清三郎 前田竜造 鎌田嘉之 沢田英一 福井治平

短期大学部同窓会創立総会

昭和二十五年に設置された短期大学部が昨三十一年四月より募集を停止した為に、全卒業生懇親の場の必要に迫られ、三月十七日(日)その発会を天六学舎四階大教室で開催し、会則、役員、行事予定などを決定した。

この同窓会の特色は、短大卒業生二千五百名を一团としたものだけに役員として理事二十四名、評議員七十二名の多数を選出したこと、運営経費は百数十万円

の基金の利子だけで賄い、会費はとらな
いと云うことである。

主な役員

会長 大森俊治
副会長 木村吾郎 前阪京成 平島徳二
監事 伊藤喜代広 小田雅亮 三宅啓正
事務長 横山茂昭

出席者

恩師 矢口孝次郎 和田 豊二 佐伯 三郎
河村 宜介 入江 深 河村 信一
宇田 米夫 太田 鶏一 角田 文雄
富山 忠三 橋田 慶蔵 山口 辰雄
河合 信雄
学校 岩崎 卯一 久井 忠雄 三島 律夫
安井 章吾 鈴木 竜男 藤本 竜造
教育後援会 石井寿一 山本順応
会員 四百三十五名

徳島支部総会

三月十七日(日)午後二時から、徳島支部春季総会を、眉山々麓音楽園で開催した。

三宅支部長の挨拶の後、母校より出席の矢野常務監事から、大学の近況報告があつた。

親睦の宴があつて愉快に時をすごし閉会したが午後五時であつた。

出席者

三宅二郎 岩本信正 中田豊雄
森良之祐 小寺善二郎 大塚右
太男 竹内秀太郎 幸田秀明
沢 和一 斎藤正美 坂東敏武

記念植樹申込者 (その六)

三月三十一日現在	十本
斯文会(昭四)	山桜
昭八会	メタセコイヤ
芝田精二	山桜
毎日新聞社関大会	銀杏
祥久会	山桜
昭七会	山桜
伊丹支部(追加)	山桜
深川 實	山桜
田口正春	山桜
甲川 巖	山桜
安井章吾	山桜
累計	以上
楠	二本 ヒマラヤ杉
山桜	百七十五本 ユーカリ
銀杏	十四本 メタセコイヤ
	十一本

昭和31年 校友名簿

在学時代の友を想うよすがに、
また、卒業後の親睦連絡に、
この一冊を備えて利用下さい

— 収載人員二六、〇〇〇余名 —

B5判 六〇〇頁
実費頒価五〇〇円
(送料当方負担)

申込先

關西大學校友課
大阪市淀川区長柄中通二丁目
振替 大阪 一七八七五番

記念植樹募集

昨秋創立七十周年を記念して施設の拡充を図り、千里山及び天六両学園に近代建築の学舎を完成し得ましたことは洵に御同慶に堪えません。

さて、この構築美に配するに樹木や芝生の景観美を以てし、造園技術の粋をあつめて、教育環境を形成することは、日々これに接する学生達にあるいは憩いの、あるいは思索の場所を与え、学習研鑽の資となるべく、また、学窓を出でては学舎と共に、一本の樹木にも母校への思慕の情を抱かしめるであります。

かかる教育環境形成の重要性に鑑み、本学では植樹造園につとめたいと存じておりますが、また有志の方々からこの趣旨に御賛同下されて樹木の御寄附にあづかり得ば幸甚に存ずる次第であります。

昭和三十三年三月

關西大學

何卒右趣旨に御賛同を賜わりまして、単価表により樹木御指定の上左記宛御申込下さいませ様御願申上げます。

一、樹木単価表

イ、楠	(高さ十尺、巾七尺、太さ目通一尺) 壹本一〇、〇〇〇円
ロ、銀杏	(高さ七尺、巾三尺、太さ目通四寸) 同 三、〇〇〇円
ハ、南豆ハゼ	樹(高さ八尺、巾五尺、太さ目通六寸) 同 六、〇〇〇円
ニ、山桜	(高さ七尺、巾三尺、太さ目通二寸) 同 五、〇〇〇円
ホ、ユーカリ	(高さ八尺、巾三尺) 同 一、五〇〇円
ヘ、メタセコイヤ	(高さ四尺一五尺) 同 一、五〇〇円

単価表の値段は送料、植込材工並に根着き迄(枯れた場合は植替)の責任保証となつて、います

二、記念植樹御申込先

關西大學 校友課
 大阪市大淀区長柄中通二ノ一二
 振替口座大阪 一七八七五番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
 昭和三十三年四月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報

第三〇二號 四月號

關西大學 法制史學會 共編
 關西大學經濟學會經濟史研究室

大阪周邊の村落史料

A5判 フランス綴箱入

本書は關西大學図書館に所蔵されている貴重な村落史料のうち、庄屋文書といわれる庄屋の蔵に放置されていた記録を纏めて、法制史及び經濟史は勿論、一般史学やその特殊部門の研究に寄与せんとして公刊されるものである。庄屋文書のなかには、庄屋自身の任命、退役から、触、達、回状、農民の五人組、宗門改、検地、耕作、年貢、水論、新田開発は勿論、田畑建物の売買賃入、奉公人、人身売買、縁組、相続、遺言、往来手形、寺送り村送り等に至るまで、百般の法律行為に関する文書までが保存されているので、近世農民の法律および社會經濟生活はこれらの史料によつて明かになるであろう。

第一輯 (庄屋文書)

二二〇頁 頒価 金四〇〇円

既刊

本輯に選んだのは訴訟に関する書類の多い河州松原村、摂州味舌、耳原兩村の庄屋留書である。

第二輯 (耕耘、拝借銀、頼母子)

一七〇頁 頒価 金三五〇円

既刊

本輯に選んだのは、農耕の基となる肥料と、その購入資金と入手方法に拮つた農民の努力と法律關係、および金融、とくに御発起無尽と称せられる藩政頼母子の運営等に関する書類である。

第三輯 (証文集、村役人)

二二五頁 頒価 金四〇〇円

既刊

(なお御入用の方は大學出版部へ直接御注文下さい)

發行者 關西大學
 發售所 關西大學出版部
 大阪市大淀区長柄中通二丁目